

高エネルギー陽子・原子核散乱

— カラーガラス凝縮アプローチ —

藤井宏次

(東京大学 駒場)

高エネルギー pA 反応の目標

- 原子核反応を用いた QGP 研究
 - 初期条件の理解
 - 観測量での原子核効果（バックグラウンド）の理解
- ハドロン波動関数の高エネルギーでの普遍的構造
 - パarton飽和現象と幾何学的スケーリング
 - “構造関数”の新しい側面
- 高エネルギー宇宙線現象の理解と、そこから得られる情報

話の予定

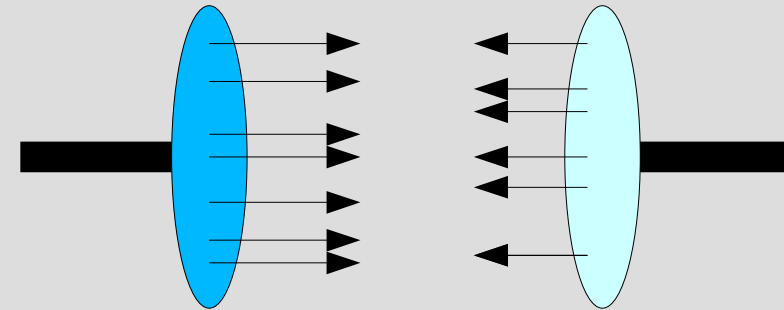
- 陽子-原子核反応 = 希薄 - 濃密系の衝突
 - カラーガラス凝縮による記述の紹介
- RHIC データとの比較
- まとめ

小さい x でのハドロン波動関数

- パarton模型

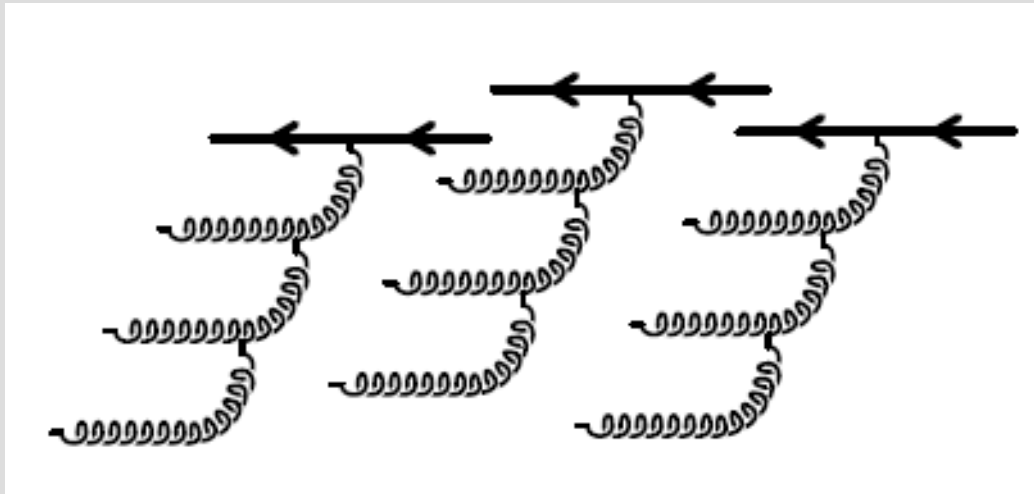
- partonの独立な散乱

- $\sigma = \int \sigma_{ab}(Q^2) f_a(x_1, Q^2) f_b(x_2, Q^2)$



- 超高エネルギー：短寿命揺らぎ (BFKL カスケード) が増大

-



$$x_2 \sim \frac{m_{\perp}}{\sqrt{s}} e^{-y}$$

カラーガラス凝縮描像

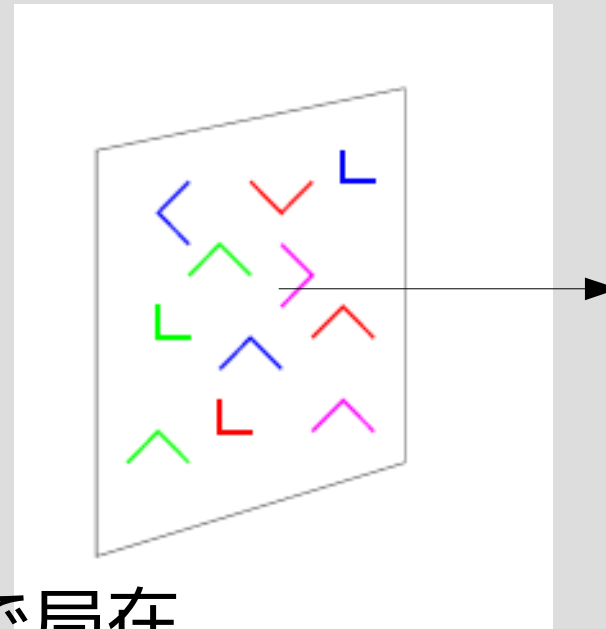
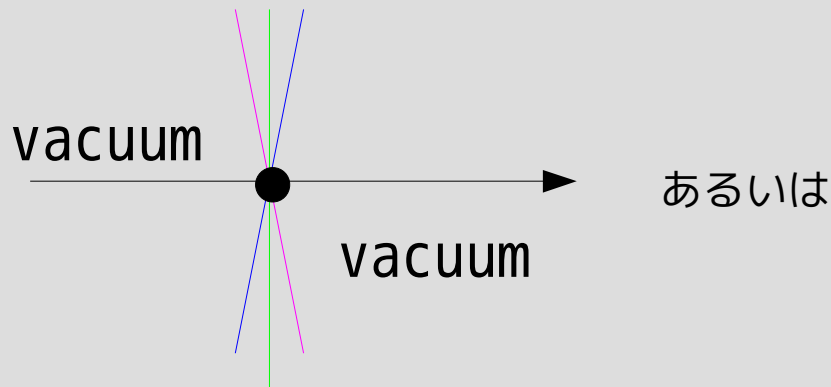
- large- x = 光速の凍結した乱雑カラー電荷
- small- x = 古典カラー場
- Yang-Mills 方程式で関係
- x の分離値は任意 ; くりこみ群での定式化

$$[D_\nu, F^{\nu\mu}]_a = \delta^{\mu+} \delta(x^-) \rho_a(\vec{x}_\perp)$$

カラーグラス凝縮描像

- large-x = 光速の凍結した乱雑カラー電荷
- small-x = 古典カラー場
- Yang-Mills 方程式で関係

$$[D_\nu, F^{\nu\mu}]_a = \delta^{\mu+} \delta(x^-) \rho_a(\vec{x}_\perp)$$



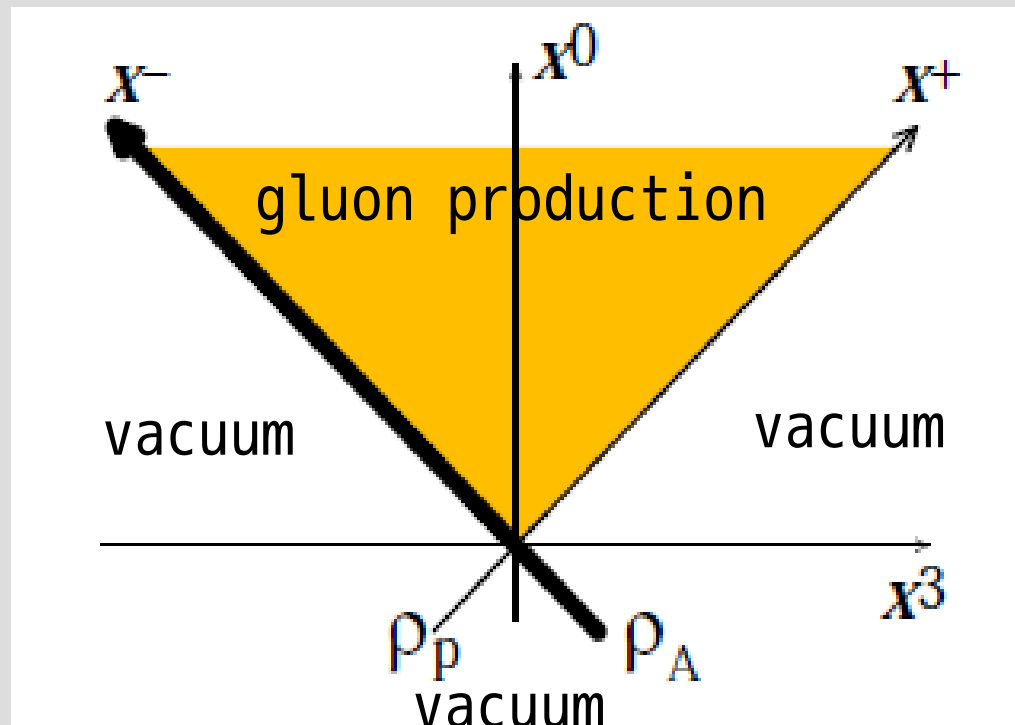
- (解) 場は横波のみが光速で局在
- 乱雑カラー電荷平均: $\langle \rho^a \rho^b \rangle \sim Q_s^2 \delta^{ab} \delta(x-y) \propto A^{1/3}$
- カラー中性条件は陽でない

カラーガラス凝縮描像での pA 衝突

- 二つの乱雑カラー電荷が交錯する時の古典カラー場

$$\begin{aligned} [D_\nu, F^{\nu\mu}]_a &= J_a^{\mu(0)} \\ J_a^{\nu(0)} &= g\delta^{\nu+}\delta(x^-)\rho_{p,a}(\mathbf{x}_\perp) + g\delta^{\nu-}\delta(x^+)\rho_{A,a}(\mathbf{x}_\perp) \end{aligned}$$

- 衝突後のグルーオン場を EoM を解いて得る (tree)



カラーガラス凝縮描像での pA 衝突

- グルーオン生成数 (LO in α_s , ρ_p , but ρ_A inf)
 - kT に依存した関数で因子化

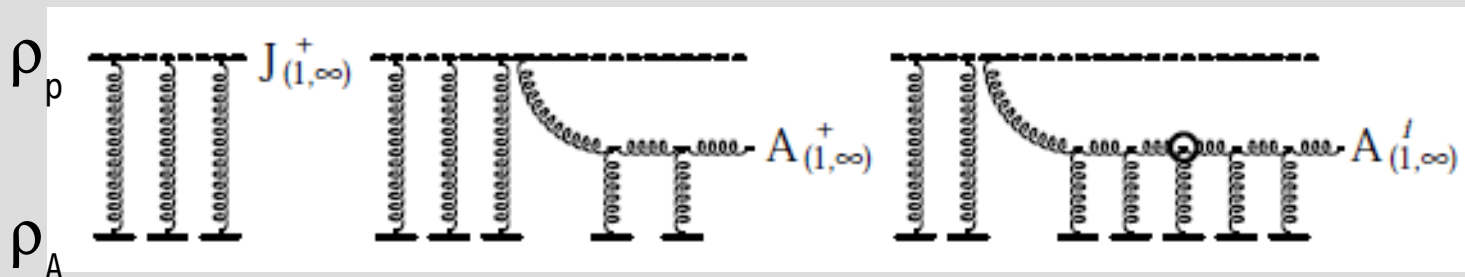
$$\frac{d\bar{N}_g}{d^2q_\perp dy} \sim \frac{\alpha_s}{q_\perp^2} \int_{k_\perp} \varphi_P(q_\perp - k_\perp) \phi_A^{gg}(k_\perp)$$

- 多重散乱効果を含み kT に依存する「グルーオン分布関数」
- MV モデル

$$\phi_A^{g,g} \sim \mathbf{k}_\perp^2 \text{FT} \langle U(\mathbf{x}) U^\dagger(\mathbf{y}) \rangle$$

$$U(\mathbf{x}) \equiv \mathcal{P} \exp \left[ig^2 \int dz^+ (1/\nabla^2) \rho(z^+, \mathbf{x}) \cdot T \right]$$

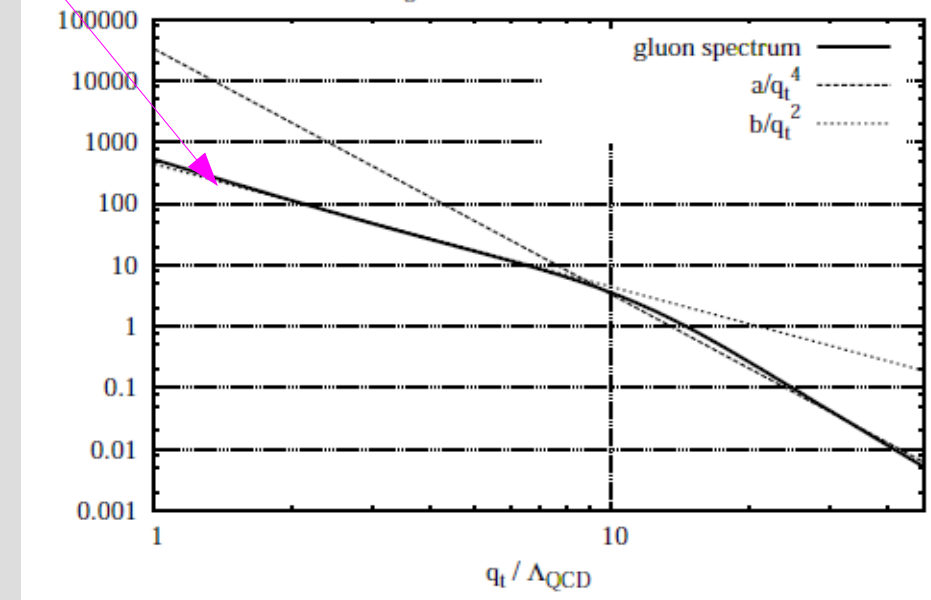
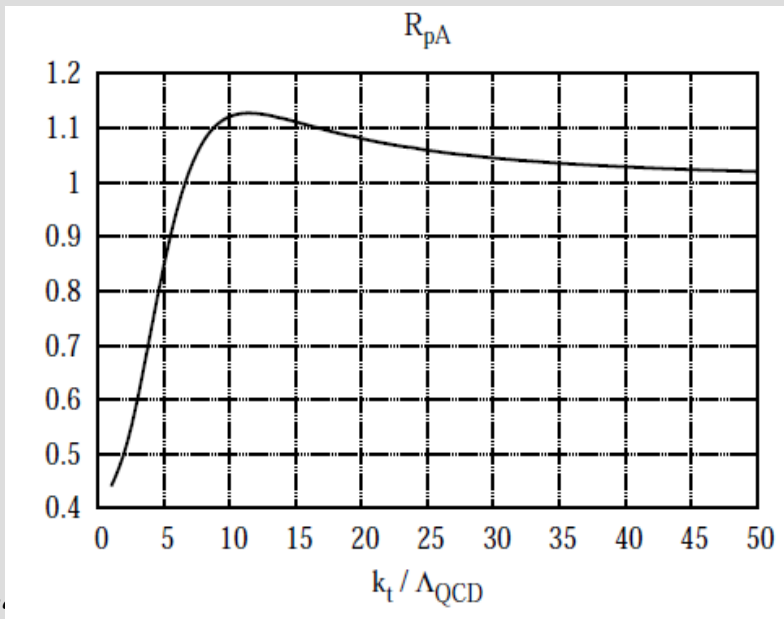
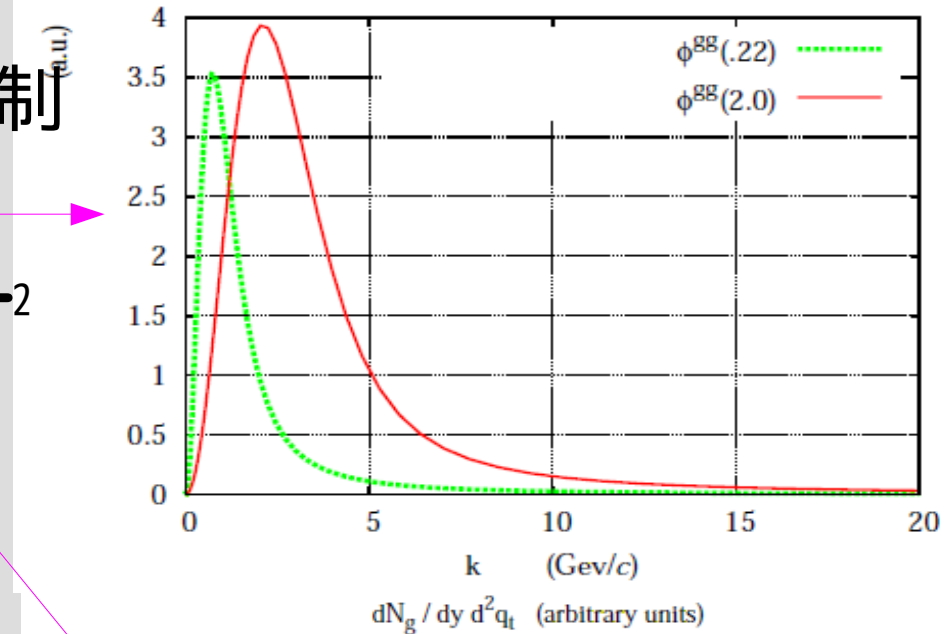
例)



カラーガラス凝縮描像での pA 衝突

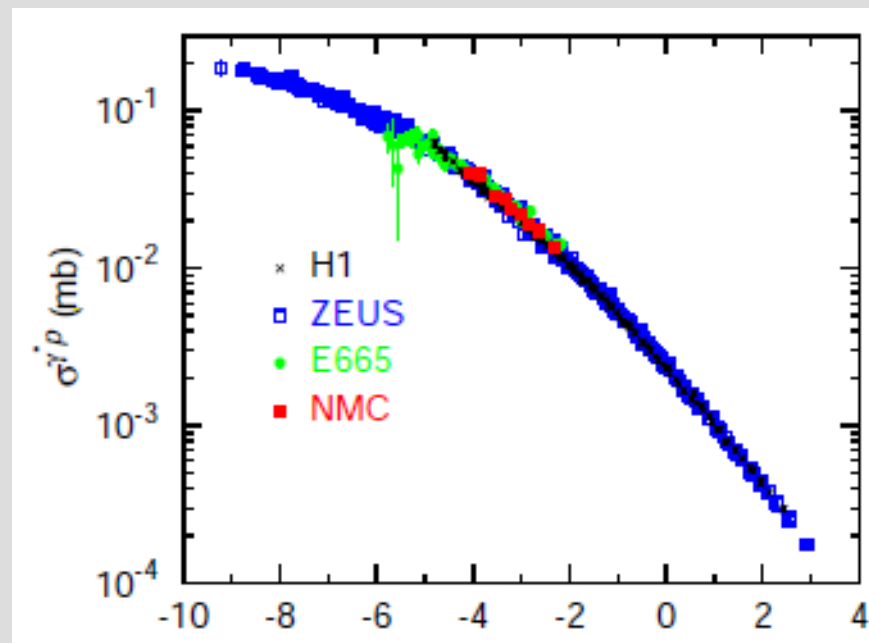
Blaizot-Gelis-Venugoplan

- 多重散乱の効果：
 - $kT < Q_s$ で「分布関数」抑制
= 多重散乱効果
 - 小さい q_T で断面積 $\sim 1/q_T^2$
 - RpA ... Cronin peak



「分布関数」の x 依存性

- HERA データ ; $Q_s^2(x) = (0.4 \cdot 10^{-4}/x)^{0.3} \text{ GeV}^2$
- しかし、広い (x, k) で使える決定版 $\phi_A(x, k)$ はない
 - nuclear (anti-) shadowing ?
 - モデル (パラメトリゼーション) となる



「分布関数」の x 依存性：量子発展

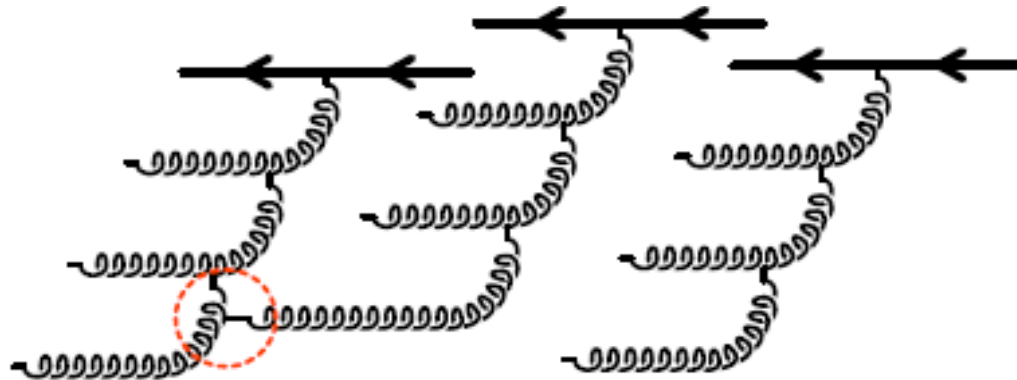
- モデル初期条件から x 発展方程式を用いた分布関数構成：
 - Balitskii-Kovchegov eqn. (large N , L_0)
 - パートン分岐 (線形) とパートン融合 (非線型)

$$\frac{\partial}{\partial Y} T_Y(\mathbf{k}_\perp) = \bar{\alpha}_s [\chi(-\partial_L) T_Y(\mathbf{k}_\perp) - T_Y^2(\mathbf{k}_\perp)]$$

$$\bar{\alpha}_s = \alpha_s N / \pi, \quad L \equiv \ln(k_\perp^2 / \Lambda^2)$$

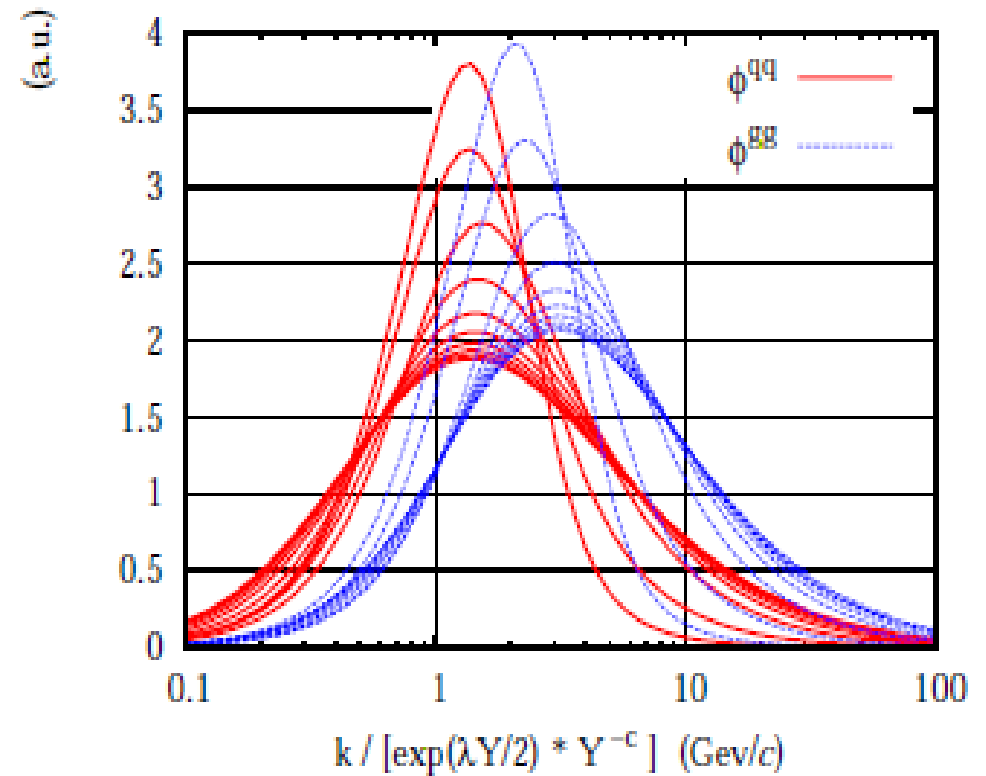
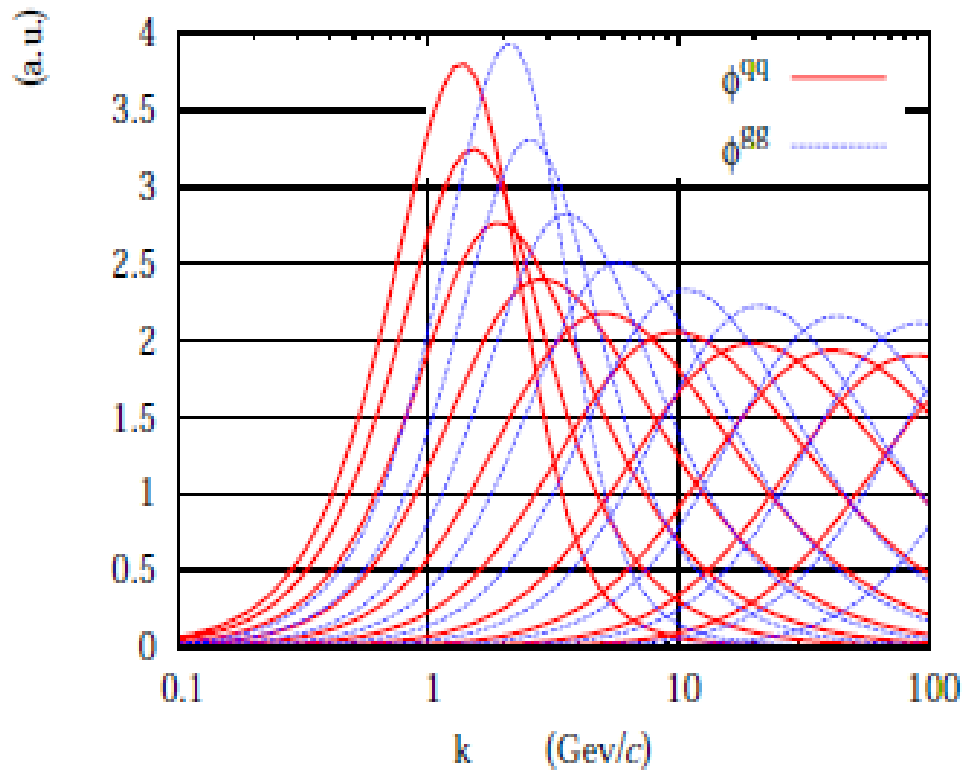
$$\chi(\gamma) = 2\psi(1) - \psi(\gamma) - \psi(1 - \gamma): \text{BFKL kernel}$$

$$T_Y(\mathbf{k}_\perp) = \int \frac{d^2 \mathbf{x}_\perp}{2\pi x_\perp^2} (1 - \langle \tilde{U} \tilde{U}^\dagger \rangle) e^{i\mathbf{k}_\perp \cdot \mathbf{x}_\perp}$$



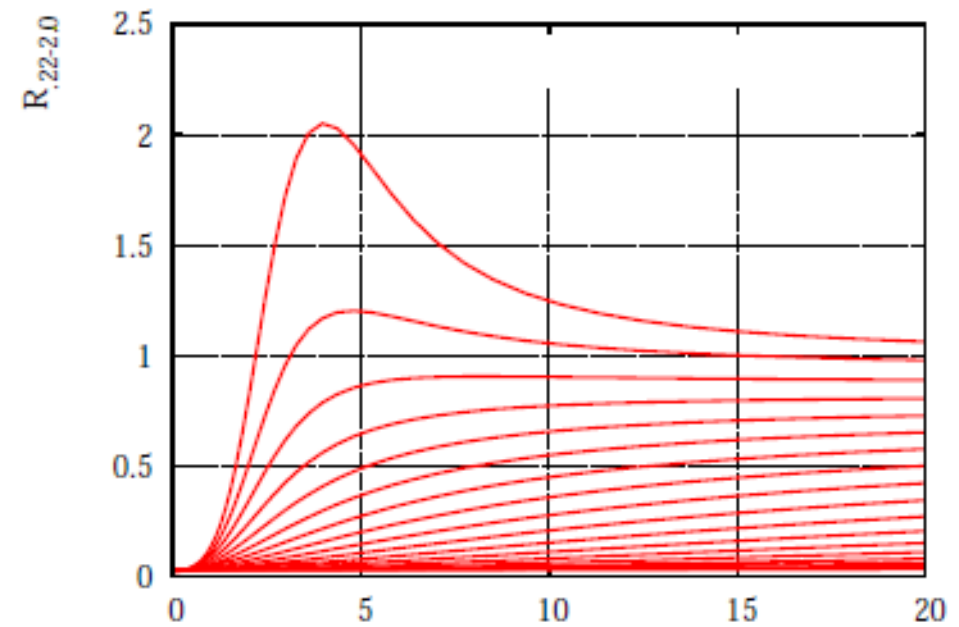
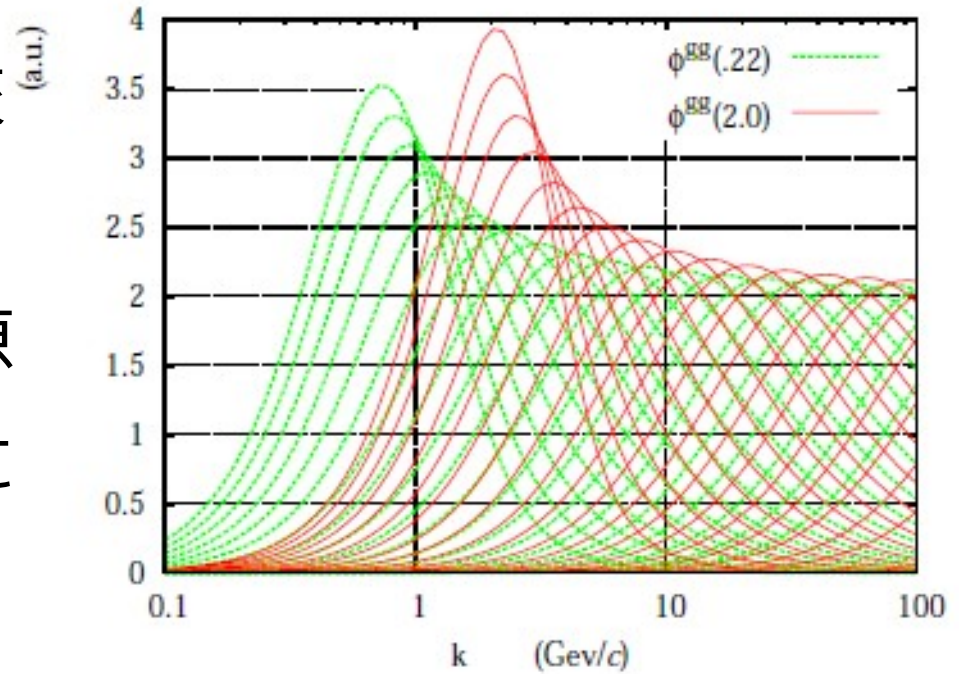
「分布関数」の x 依存性：量子発展

- x 発展方程式
 - 数値解：large k の増大と small k の抑制
 - スケーリングの性質



「分布関数」の x 依存性：量子発展

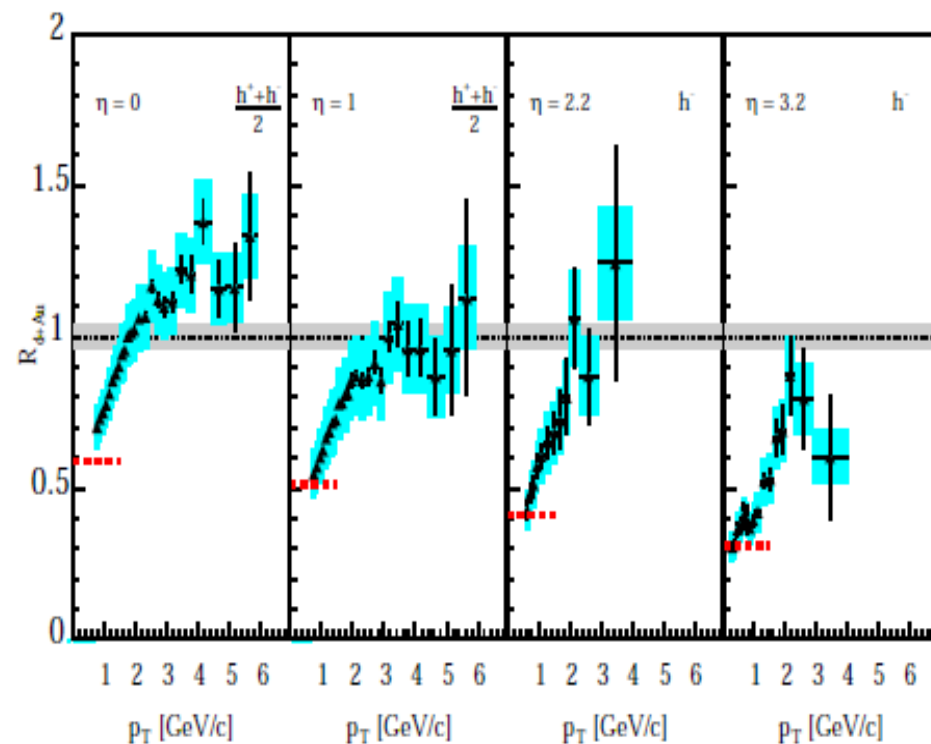
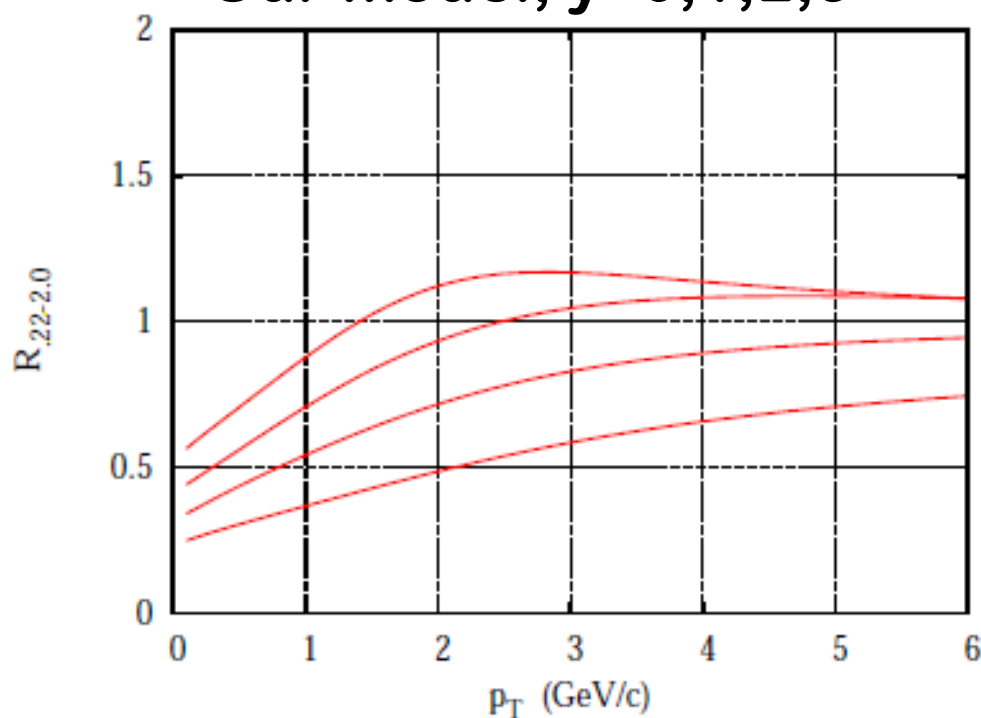
- 「陽子」と「原子核」の比較
 - 原子核の方が速く発展
 - 比を取ると、 x とともに原子核グルーオンが相対的に抑制される



RdA at BRAHMS

- π 生成 (グルーオンのみ)
- d-Au $\sqrt{s}=200$ GeV
- $Q_s^2 = .22$ vs 2.0 GeV²

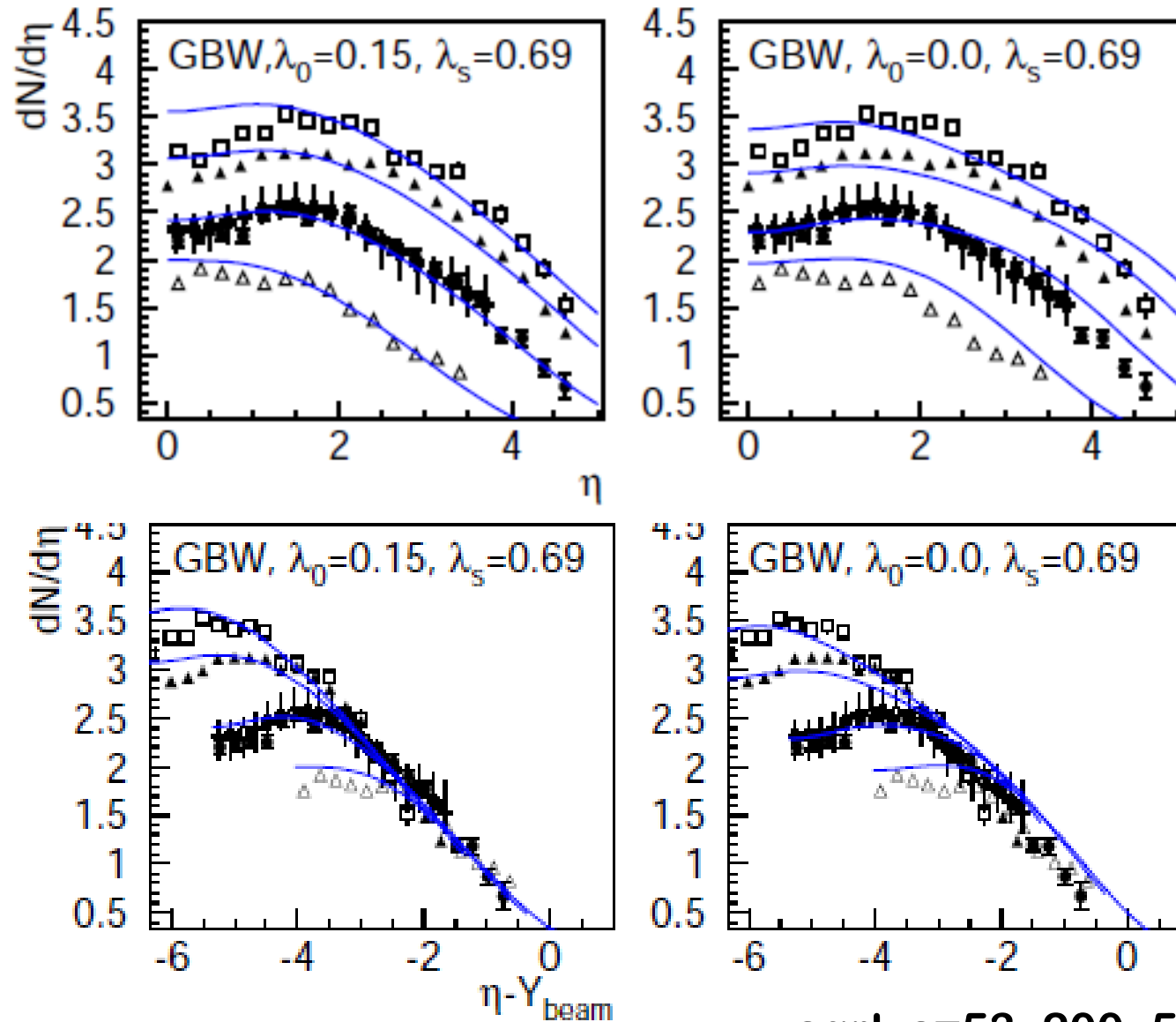
Our model, $y=0,1,2,3$



Limiting fragmentation

Gelis-Stasto-Venugopalan

- y_{beam} から測定した dN/dy をモデルで再現する



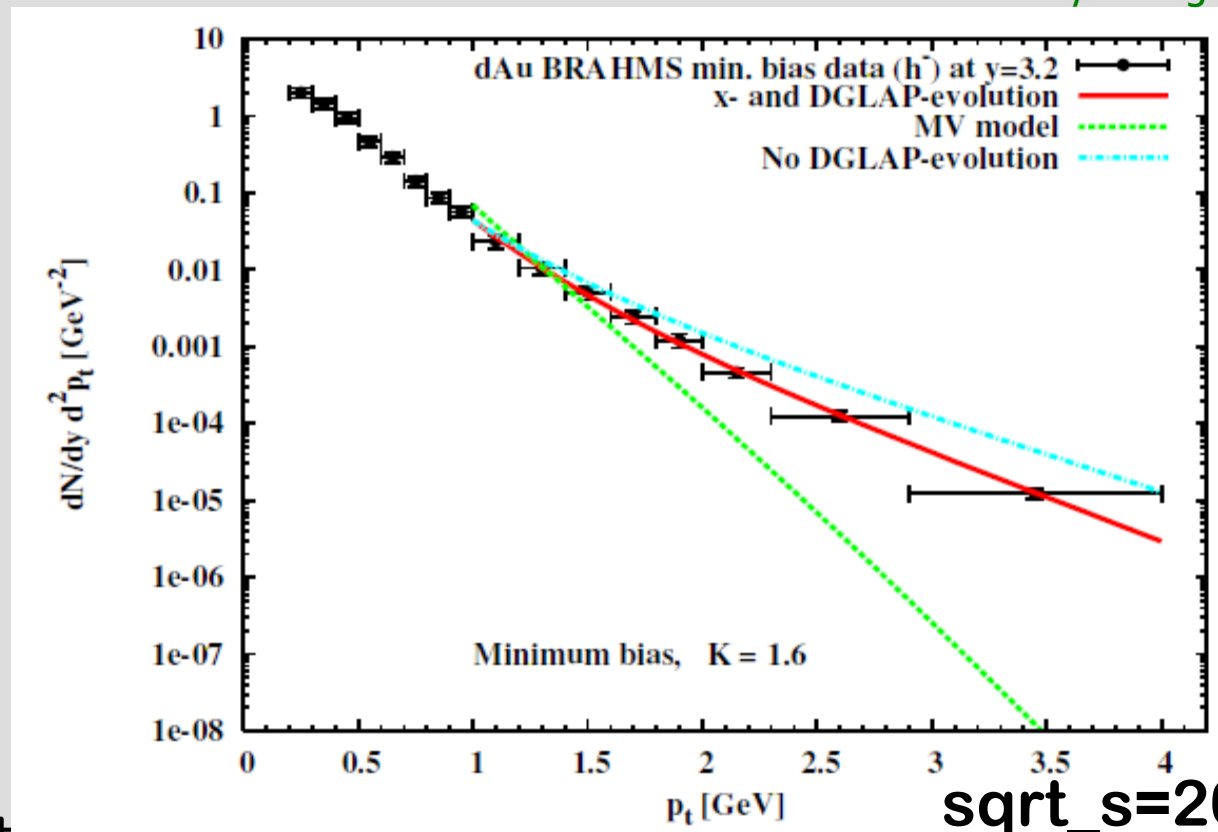
Asymmetric treatment

- large x from p , small x from Au

- 陽子構造関数 . 原子核 CGC

- $\sigma = \text{int} \sigma_{ab} f_a(x_1, Q^2) \phi_{Ab}(x_2, k) \text{frag.fn.}(Q^2)$

Dumitru-Hayashigaki-Jalilian-Marian



まとめ

- **sqrt_s=200GeV** 領域で、原子核波動関数の **small-x** 成分を **CGC** で記述した例を紹介した
- 前方ラピディティで、粒子生成が抑制するという特徴は、**CGC** 描像と一貫している
- **limiting frag.**, **p_T spectrum** なども記述できる
- **LHC, UHCR** の前方が **CGC** に最適の場所：
 - $\phi_A(\mathbf{x}, \mathbf{k})$ に対する情報
 - **NLO** の枠組と数値評価